

# 位置を正確に伝える難しさ ～古い植生調査資料の位置情報を読み取る～

自然・環境再生研究部 生物資源研究グループ

橋本佳延



## 【博物館資料にとって大切な位置情報】

分類学や生態学の研究において、野外調査データの信憑性の判断では「どこで」得られたのかという位置情報の記録を重視します。そのため、標本採集や野外調査の際には、その場所を特定できる情報を必ず記録します。

## 【位置情報はどのように記録する？】

現在は、位置情報は緯度経度で数字で正確に記録できます。緯度経度は、人工衛星が測位した結果をGPSで受信して取得します。測量用GPSであれば数センチの誤差で収まるほどの高精度です。

GPSがない時代では、調査者は国土地理院や自治体が発行する地図や登山地図を携えて調査に出かけ、地形を読み解きながら気圧高度計やコンパスを使って位置を特定し、地図にその場所を点で記していました。地図に記録しない場合は、住所や山、川、谷の名前、登山道名などを調査票などに記録していました。

## 【古い資料の位置情報を読み解くコツ】

しかし、古い時代の方法で記録された位置情報の読み解きにはいろいろのコツが必要です。例えば次のような苦労があります。

### (1) 古い地図だと正しい位置（緯度経度）が分からない

国土地理院の旧版地図（概ね1960年代以前に作成）は古い測量技術で作成されているため、山林などのエリアの精度が粗く、正しい緯度経度が読み取れません。現在の地図と旧版地図を照らし合わせ、地形と標高の記録も加味して補正し位置を特定する必要があります。

### (2) 開発などで地形がなくなる。市町村合併や区画整理で調査時に記録した住所名がなくなる。その地域に固有の土地や地形の呼び名が記述されている。

この場合、旧住所が記録された書籍、文献、旧地図やWEBサイトを活用したり、登山地図や登山ガイドなどを頼りに場所を特定しています。

地理と歴史分野の知識の重要性を痛感しています。